北宋期における李白への視線について

湯浅陽子

はじめに

李白（七〇一～七六二）は、盛唐期を代表する詩人として杜甫（七一二～七七〇）と併称されながらも、杜甫のように後世において詩作の規範とされ「詩聖」として崇拝されるには至らなかった。ここでは、両者に対する評価が分離する北宋中期、具体的には歐陽脩（一〇〇七～一〇七二）らのグループが活動する仁宗期（一〇二三～一〇六三）を中心として、その後の北宋末期までを視野に入れつつ、当時の知識人層における李白という人物およびその詩作に対する評価の様相を検討し、宋代の詩風形成との関わりについて考える。

一　仁宗期における李白・杜甫詩の流行

劉攽（一〇二二～一〇八八）は、『中山詩話』（歴代詩話　中華書局一九八一年初版　所収本）のなかで、次のように述べている。

楊大年不喜杜工部詩、謂爲村夫子。鄉人有強大年者、續杜句曰「江漢思歸客」。楊亦屬對、鄉人徐擧「乾坤一腐儒」。楊黙然若少屈。歐公亦不甚喜杜詩、謂韓吏部絶倫。吏部於唐世文章、未嘗屈下、獨稱道李杜不已。歐貴韓而不悦子美、所不可曉。然于李白而甚賞愛、將由李白超趠飛揚爲感動也。

楊大年　杜工部詩を喜ばず、謂ひて村夫子と爲す。鄉人に大年に強ひる者有り、杜の句の「江漢思歸客」と曰ふに續けしむ。楊また屬對するに、鄉人徐ろに「乾坤一腐儒」を擧ぐ。楊　黙然として少しく屈せるが若し。歐公　また甚だしくは杜詩を喜ばず、韓吏部絶倫なりと謂ふ。吏部は唐世の文章に於て、未だ嘗て屈下せず、獨り李杜を稱道して已まざるのみ。歐の韓を貴ぶも子美を悦ばざるは、曉るべからざる所なり。然るに李白に于ては甚だ賞愛するは、李白の超趠飛揚して感動を爲すによるを將てなり。

ここで劉攽は、北宋初期に一世を風靡した西崑体の中心人物の一人であった楊億（字大年　九七四～一〇二〇）と、その後、北宋中期に西崑体を超えた新しい詩風を模索した歐陽脩（文忠公　一〇〇七～一〇七二）とが、いずれも杜甫詩を好まなかったことについて検討している。まず楊億については、杜甫の詩を好まずに田舎学者だと批判したと記しているが、楊億をその中心人物のひとりとする西崑体が、晩唐の李商隱（八一三～八五八）の詩風を作詩の模範とし、典故の多用と修辞の華麗さの追及をその大きな特色としていることを思えば、現実の事物を写実的に描き出そうとする傾向を持つ杜甫詩に対するこのような反応は、特に不思議なものとは言えないだろう。しかし、ここにはまた、楊億が活動していた時代に、田舎住まいの「鄉人」―当時における最先端の洗練された文化を身につけていたとは思われない人物―が、杜甫詩をよく読み、

愛好していたことが記されており、そこからは、すでに北宋初期には、杜甫詩の愛好が、宮廷の館閣に出入りするような文人層のみならぬ、より広範な層にまで広がっていた様子を窺うことができる。

続いて劉攽は、彼と同時代人であり、知人でもあった歐陽脩について、中唐期の韓（吏部）愈を高く評価し、その文学に多くを学んでいる彼が、韓愈が特に高く評価した李白・杜甫のうち、杜甫を評価していないことを、不可解と評している。韓愈が李・杜の双方を高く評価していたことは、例えば「送孟東野序」（韓昌黎文集校注巻四　中國古典文學叢書　上海古籍出版社　一九八六年）で、「唐之有天下、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀、皆以其所能鳴。」（唐の天下を有つに、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀、皆な其の能くする所を以て鳴る。）と述べ、李・杜を唐代を代表する詩人として併称していることからも明らかである。劉攽のこのような態度は、彼らの活動した時代においては、杜甫詩あるいは李・杜に対する高い評価が、広く共有されていたことを窺わせるだろう。

歐陽脩が杜甫詩を好まないことを不可解と評する表現は、劉攽のみに止まらず、さらに後の、陳師道（一〇五三～一一〇一）『後山詩話』（歴代詩話本）の、「歐陽永叔不好杜詩、蘇子瞻不好司馬『史記』。余毎與黄魯直怪嘆、以爲異事。」（歐陽永叔は杜詩を好まず、蘇子瞻は司馬の『史記』を好まず。余　毎に黄魯直と怪しみ嘆じ、以て異事と爲す。）にも見ることができる。歐陽脩の弟子である蘇軾の、そのさらに弟子の世代にとっても、歐陽脩が杜甫詩を好まないことは、珍しいことと感じられたようだ。彼らの世代においては、すでに杜甫詩が詩作における亀鑑として認識される状況にあったことは言うまでもない。

では、歐陽脩が杜甫詩を好まず李白詩を好むということは、彼の生きた当時においてはどのように位置づけられるのだろうか。それを考えるための手がかりとして、北宋初期から中期にかけての時期における詩風の流行について述べた、蔡啓（蔡居厚。紹聖元年（一〇九四）進士（拠『至順鎮江志』巻十八））『蔡寛夫詩話』（郭紹虞『宋詩話輯佚』巻下　中華書局　一九八七年第二版）の、次のような記事を挙げてみよう。

國初沿襲五代之餘、士大夫皆宗白樂天詩、故王黄州盟一時。祥符・天禧之間、楊文公・劉中山・錢思公專喜李義山、故崑體之作、翕然一變。而文公尤酷嗜唐彦謙詩、至親書以自隨。景祐・慶曆後、天下知尚古文、於是李太白・韋蘇州諸人、始雜見於世。杜子美最爲晩出、三十年來學詩者、非子美不道、雖武夫女子皆知尊異之、李太白而下殆莫與抗。文章隱顯、固自有時哉。今太白諸集猶兼行、獨彦謙殆罕有知其姓名者。詩亦不多、格力極卑弱、僅與羅隱相先後、不知文公何以取之。當是時以偶儷爲工耳。

國初　五代の餘を沿襲し、士大夫　皆な白樂天詩を宗とし、故に王黄州　一時に盟す。祥符・天禧の間、楊文公・劉中山・錢思公　專ら李義山を喜び、故に崑體の作、翕然として一變す。而るに文公尤も酷だ唐彦謙詩を嗜み、親ら書して以て自ら隨ふるに至る。景祐・慶曆の後、天下　古文を尚ぶを知り、是に於いて李太白・韋蘇州諸人、始めて雜りて世に見はる。杜子美　最も晩く出づるを爲し、三十年來　詩を學ぶ者、子美に非ざれば道はず、武夫女子と雖も皆な知りて尊び之を異とし、李太白而下　殆ど與に抗ふ莫し。文章の隱顯は、固に自ら時有るかな。今　太白の諸集　猶ほ兼ねて行はれ、獨り彦謙　殆ど罕に其の姓名を知る者有るのみ。詩はまた多からず、格力　極めて卑弱にして、僅かに羅隱と相ひ先後たるのみにして、文公の何ぞ以て之を取るかを知らず。當に是の時に偶儷を以て工と

爲すのみなるべし。

蔡啓がここに記している、北宋初期から中期における流行詩風の変遷を整理すると、およそ次のようになるだろう。

① 建国当初（九六〇～）

五代の詩風を継承。白居易詩が貴ばれ、王禹偁（知黄州）が盟主となる。

② 眞宗大中祥符（一〇〇八～一〇一六）・天禧（一〇一七～一〇二一）年間

楊億（文公）・劉筠（中山）・錢惟演（思公）による李商隱（字義山）詩の愛好。彼らを中心とする西崑体詩風の一世風靡。楊億は唐彦謙詩も酷愛し手抄本を携帯する。

③ 仁宗景祐（一〇三四～一〇三八）・慶暦（一〇四一～一〇四八）年間以降

古文（「古い時代の文学」の意か。）尊重の広範な普及に伴う、李白（字太白）・韋應物（知蘇州）らの詩の出現。杜甫（字子美）詩の出現は最も遅れる。

④ その後～三十年後の現在まで

杜甫（字子美）詩の大流行。詩を学ぶ知識人の評価を独占するのみならず、武人・婦人にまで広く知られ、特別な評価の対象とされる。李太白ら、他の詩人はほとんど対抗できない。李白等の別集はなお平行して通行するが、唐彦謙は忘れられた存在となる。

蔡啓はここで、隠逸者や僧侶を中心とする人々に流行した晩唐体の詩風には触れていないものの、白（居易）体の流行と、これに続く西崑体の流行を指摘しており、その宋初の詩風の変遷についての認識は、現在の一般的な理解と大きく齟齬していないと思われる。また蔡啓はその後の状況について、③④の仁宗期における「古文」尊重の風潮を受け、まず李白・韋應物らの詩が現れ、その後に杜甫詩が現れるという時差があったと記している。

現在通行している李白別集である清・王琦『李太白全集』（中華書局中國古典文學基本叢書　一九八一年第二版）に収められた唐の李陽冰「草堂集序」・魏顥「李翰林集序」・宋の樂史「李翰林別集序」、及び宋敏求・曾鞏・毛漸「李太白文集後序」の記すところによると、唐から北宋中期における李白別集の整理は、概ね次のような過程で進められている。

李白から直接託された草稿を、唐・李陽冰が『草堂集』十巻に編集し（七六二）、さらに宋・樂史が収集整理した十巻分をこれに加えて『李翰林集』二十巻としたが、その後、樂史は、三館所蔵の資料から集めた『李翰林別集』十巻を編んだ（九九八）。さらに宋敏求が、王洙蔵の三巻本詩集（下巻を佚す）から治平元年（一〇六四）に得た二百四篇と、唐・魏萬撰の二巻本詩集から得た四十四篇、および唐類詩・刻石・他人の別集からの七十七篇を加えて整理し、熙寧元年（一〇六八）に、詩及び文六十五篇を収める三十巻本を編集したが、分類は旧版を継承したとされているので、詩体別と考えられる。さらに一世代あとの曾鞏が、この宋敏求編集本を年代順に再編集した編年体テクスト『李白詩集』（已佚）を編んだ。毛漸「李太白文集跋」によると、この編年体テクストは、その後の印刷技術の普及を受け、毛漸の校勘を経て、晏知止によって元豐三年（一〇八〇）に版本化されている

ちなみに、王洙編の『杜工部集』二十巻は、寶元二年（一〇三九）（王洙「杜工部集序」末尾の日付による。）に登場し、さらに王琪らがそれに整理を加えたものが嘉祐四年（一〇五九）四月（王琪「杜工部集後記」末尾の日付による。）に版行されているので、王洙編『杜工部集』

二十巻に先行して読まれていた李白別集は、宋・樂史編の『李翰林集』二十巻及び『李翰林別集』十巻ではないかと考えられる。

ここで、歐陽脩が杜甫よりも李白をより好んだということに立ち帰ると、歐陽脩は、仁宗天聖八年（一〇三〇）年に進士及第し、慶暦の新政では朋党の議の渦中の人となり、その後も官僚として活動し続け、神宗熙寧五年（一〇七二）に没している。蔡京が記した流行の情況が当時の現実をよく伝えているならば、歐陽脩が活動したのは、まず李白・韋應物詩が世に出、それに遅れて杜甫詩が出現して次第に李・韋詩を上回る流行と広範な層からの支持を獲得していった時期に該当する。歐陽脩が生涯にわたって、若年の頃から馴染んだ李白詩をより好んだのには、そのような時代背景も関わっていたのではないだろうか。

二　歐陽脩における李白のイメージ

既に見た劉攽『中山詩話』の章段では、歐陽脩が特に李白の作品を好んだ理由として、「將由李白超趠飛揚爲感動也。」（李白の超趠飛揚して感動を爲すによるを將てなり。）、つまり、李白が他から抜きん出て飛び上がるような生気を持ち、それが人の心を動かすからだと考えていた。前章で述べたような時代背景があるとしても、歐陽脩が李白詩を好んだことには、やはり彼自身の個人的な好みや志向が反映されているだろう。そこで次に、歐陽脩自身の詩文を資料として、彼が李・杜をどのように位置づけ、また両者の個性の違いをどのように捉え、さらに李白をどのように好んでいるのかについて検討したい。

まず、李白と杜甫とを併称する例として「感二子」（居士集巻九　歐陽文忠公集　四部叢刊本）を挙げてみよう。この詩は十三韻からなる七言古詩であり、その前半部では韓愈「雙鳥詩」の表現を意識しつつ、蘇舜欽・梅堯臣を諸々の鳥に抜きん出た「鳴鳳」になぞらえ、彼らの死後には天地の秩序が失われたと述べ、重ねて韓愈ら中唐期の発想を踏まえて、蘇・梅の短命は、天地や鬼神の有様を描き尽くして、造物者の枢密を捉えたために憎まれたからであろうと述べている。前半部分の内容が、このように中唐期の発想の影響を色濃く受けたものであるのに対して、後半部では、話題を盛唐期の李白と杜甫に絞っている。韓愈「雙鳥詩」に登場する二羽の怪鳥の寓意については諸説が存在するが、そのなかには李白・杜甫の喩えとする説（蘇軾「書丹元子所示李太白真」等）もあり、この詩の前後の展開もこれと関わると思われる。次にその後半部分を示す。

昔時李杜爭横行　昔時　李杜　爭ひて横行し
麒麟鳳凰世所驚　麒麟　鳳凰　世の驚く所となる
二物非能致太平　二物　能く太平を致すに非ず
須時太平然後生　時の太平なるを須ち　然る後に生ず
開元天寶物盛極　開元　天寶　物の盛んなる極み
自此中原疲戰爭　此れより中原　戰爭に疲る
英雄白骨化黃土　英雄の白骨　黃土と化し
富貴何止浮雲輕　富貴　何ぞ止だ浮雲の輕きがごときのみなるや
唯有文章爛日星　唯だ文章の爛きて日星のごとき有り
氣凌山岳常崢嶸　氣　山岳を凌ぎ　常に崢嶸たるのみ
賢愚自古皆共盡　賢愚　古より　皆な共に盡き
突兀空留後世名　突兀として空しく後世に名を留む

ここではまず、李白・杜甫がその桁外れの力量を競うように発揮したことを、「横行」（無茶をして暴れまわる）と表現し、さらに両者を併称

して麒麟と鳳凰に喩えているが、麒麟・鳳凰の出現が太平将来の瑞祥であるのに対して、彼らは太平の世の中から生み出されたものであるという相違点を指摘する。またさらに李・杜の文学を高揚し爛熟した文化の精華として位置づけ、そうであるからこそ、その後の動乱期においても、太陽や星のような輝きや山岳をも凌駕するほどの「気」を発して、名声を保持し得たのだと考えている。

次に、李白と杜甫の詩風の違いに着目する例として、「李白杜甫詩優劣説」（歐陽文忠公集巻一百二十九　筆説）を挙げてみよう。

「落日欲没峴山西、倒着接籬花下迷。襄陽小兒齊拍手、大家爭唱白銅鞮。」此常言也。至於「清風明月不用一錢買、玉山自倒非人推」、然後見其横放、其所以警動千古者、固不在此也。杜甫於白得其一節、而精強過之、至於天才自放、非甫可到也。

「落日　没せんと欲す　峴山の西、倒に接籬を着け　花下に迷ふ。襄陽の小兒　齊しく手を拍ち、大家　爭ひて唱ふ　白銅鞮。」此れ常言なり。「清風　明月　一錢の買ふを用ひず、玉山　自ら倒るるは　人の推すに非ず」に至り、然る後に其の横放を見はすも、其の千古を警動する所以は、固より此に在らざるなり。杜甫は白に於いて其の一節を得、而るに精強なること之に過ぐ、天才自放たるに至りては、甫の到るべきに非ざるなり。

ここでの歐陽脩は、李白「襄陽歌」（李太白全集巻七　なお、「大家」を「攔街」に作る。）を引きつつ、その特性として「横放」（ほしいまま）を指摘し、さらに彼の詩作が遠い後世までも驚嘆させ動揺させる理由は、それだけに止まるわけではないと述べているが、その他の「所以」については具体的に言及していない。さらに、杜甫については、李白の詩風の一部分を学び取り、「精強」（精錬された強靭さ）という点において白を凌いでいるが、天与の才能をみずから思いのままに発揮することにおいては、白の水準に到達できないと述べている。歐陽脩は、精錬された強靭さを持つ杜甫詩を高くしてはいるのだが、より彼の個人的な好みに合ったのは、天賦の才の自由な発露を感じさせる李白の作品のほうであったのだろう。

歐陽脩が李白の詩作や人となりについて言及した資料は多いとは言えないが、そのなかに、「太白戲聖兪」（太白　聖兪に戲る）（居士集巻五）がある。『四部叢刊』本テクストのこの詩の題下には、「一作『讀李白集効其體』。」（一に『李白集を讀みて其の體に効ふ』に作る。）という注が付されているのだが、詩のなかで詩句の表現を踏まえつつ李白の生涯を辿っており、歐陽脩が李白という詩人をどのように捉えていたのかを検討するための資料となり得るものである。全二十句からなる本文中にコラージュするように散りばめられた詩句は、大半が李白のものだが、その他に杜甫や白居易の詩句を意識したと思われるものも含んでいる。以下では、踏まえられている詩句を確認しつつ、この詩全体の内容を概観したい。やや長編の詩なので、換韻箇所で区切って見ていくことにする。

開元無事二十年　　開元　事無きこと二十年
五兵不用太白閑　　五兵　用ひられず　太白は閑かなり
太白之精下人間　　太白の精　人間に下る

冒頭部分。押韻は「閑」「間」がいずれも『平水韻』上平聲十五刪。唐玄宗開元年間（七一三～七四一）には二十年間平和な状態が続き、矛・戟・弓・剣・戈という五種の兵器が用いられる戦争が起こることもなく、殺伐を司るとされる太白星（金星）も、静かに落ち着いていたという。ここではまだ李白の名は挙げず、太白星の精が人間界に下ったとだけ述べているが、これは『新唐書』巻二百二文苑傳「李白」（中華書局本）

にも収められる、「白之生、母夢長庚星、因以命之。」（白の生まるるや、母長庚星を夢む、因りて以て之に命く。）という、李白の出生を神秘的に伝説化する逸話（『舊唐書』はこの記事を収めない。）に基づくものであることは言うまでもないが、より早い時期の同様の表現の例として、陳新氏・杜維沫氏『歐陽修選集』（古典文學名家選集　上海古籍出版社　一九八六年）百五十二～百五十四頁のこの詩の注は、唐・裴敬「翰林學士李公墓碑」（李太白全集巻三十一）の「或曰、太白之精下降、故字太白。」（或ひと曰く、太白の精　下降す、故に太白と字す。）を指摘されている。

李白高歌蜀道難　李白　高歌す　蜀道難
蜀道之難難於上青天　蜀道の難きは青天に上るよりも難し
李白落筆生雲煙　李白　落筆するに雲煙を生ず
千奇萬險不可攀　千奇　萬險　攀づるべからざるに
却視蜀道猶平川　却つて蜀道を視ること猶ほ平川のごとし

第四句から第八句。押韻は「天」「煙」「川」が『平水韻』下平聲一先。「難」は上平聲十四寒、「攀」は上平聲十五刪。ここでは「李白」という名を二度登場させ、彼の名声を高める契機となった「蜀道難」について述べる。「蜀道難」については、唐・孟棨『本事詩』「高逸」等に記される、当時の文壇の中心人物であった賀知章がこの作品を高く評価して「謫仙人」と賞賛したことによって、李白の名声が高まったという逸話がよく知られているが、ここではそれには直接触れずに作品の冒頭部分をそのまま引用し、続いてそれを書く筆の飛ぶような勢いに言及する。「落筆生雲煙」は、杜甫「飲中八仙歌」（杜詩詳註巻二　中華書局　中國古典文學基本叢書　一九八九年第三版）で草書家の張旭について述べる、「張旭三杯草聖傳。脱帽露頂王公前、揮毫落紙如雲煙。」（張旭　三杯草聖傳へ、脱帽し頂を露はす　王公の前。毫を揮ひ紙に落とすに雲煙の如し。）に類似しており、これを意識したものかと思われるが、杜甫と歐陽脩の詩句はいずれも、高度な芸術的表現が生み出される時の尋常を逸脱した迫力とスピード感を表現しようとするものである。ただ、この部分の最後の第七・八句の、「千奇　萬險　攀づるべからざるに、却つて蜀道を視ること猶ほ平川のごとし。」という表現は、李白の「蜀道難」（李太白全集巻三）の表現に沿うものではなく、「蜀道難」の末尾では、「蜀道之難、難於上青天」を再度繰り返し、さらに「側身西望長咨嗟」（身を側だてて西望し長く咨嗟す。）と、西方へ続く険しい道を振り返って深いため息をついている。

宮娃扶來白已醉　宮娃　扶け來たるに　白　已に醉ひ
醉裏詩成醒不記　醉裏に詩成り　醒むれば記へず

第九句「醉」・第十句「記」はいずれも去聲四寘。翰林供奉として玄宗の宮中に仕えた頃の、天衣無縫の詩人としての李白を描く。陳氏・杜氏が指摘されるように、『新唐書』巻二百二李白傳の、

帝坐沈香亭子、意有所感、欲得白爲樂章。召入、而白已醉。左右以水頰面、稍解、援筆成文、婉麗精切、無留思。

帝　沈香亭子に坐し、意に感ずる所有り、白を得て樂章を爲さしめんと欲す。召し入る、而るに白は已に醉へり。左右　水を以て面を頰ふに、稍く解け、筆を援して文を成すに、婉麗精切にして、留思無し。

等の逸話を踏まえると思われる。

忽然乘興登名山　忽然として興に乘じて名山に登るに
龍咆虎嘯松風寒　龍咆え　虎嘯き　松風寒し
山頭婆娑弄明月　山頭　婆娑として明月を弄び

九域塵土悲人寰　　九域　塵土にして　人寰を悲しむ

第十一～十四句。『平水韻』では「山」「寰」が上平聲十五刪、「寒」が上平聲十四寒。超俗の隠逸者として、名山に遊び月を愛でる李白を描く。この部分の踏まえる李白詩の表現として、陳氏・杜氏は、まず第十一・十二句について、李白「夢游天姥吟留別」（李太白全集巻十五）の、「熊咆龍吟殷巖泉、慄深林兮驚層巔、…且放白鹿青崖間、須行即騎訪名山。」（熊咆え龍吟じて巖泉を殷んにし、深林に慄えて層巔に驚く、…且く白鹿を青崖の間に放ち、須らく行きて騎に即きて名山を訪ぬるべし。）を挙げ、また第十三・十四句については、「古風五十九首」其十九（同巻二）の、「西上蓮花山、迢迢見明星。…俯視洛陽川、茫茫走胡兵。流血塗野草、豺狼盡冠纓。」（西のかた蓮花山に上り、迢迢として明星を見る。…俯きて洛陽の川を視るに、茫茫として胡兵を走らす。流血　野草に塗し、豺狼　冠纓を盡す。）を挙げる。それぞれ、名山に登って龍を含む恐ろしげな動物の咆哮を耳にする、また高山の頂で月や星を仰ぎ、かつ俯いて荒廃した地上の世界を悲しむという内容であり、歐陽脩の踏まえるところとなっていると思われる。また、第十四句の、この世ならぬ場所から「人寰」の「塵土」を下方に眺めるという表現は、白居易「長恨歌」（白居易集箋校巻十二）の「回頭下望人寰處、不見長安見塵霧。」（頭を回らし下に人寰の處を望むに、長安は見えずして塵霧を見る。）とも類似する。

吹笙飲酒紫陽家　　笙を吹き　酒を飲む　紫陽の家
紫陽真人駕雲車　　紫陽真人　雲車に駕す
空山流水空流花　　空山　流水　空しく花を流し
飄然已去凌青霞　　飄然として已に去り　青霞を凌ぐ

第十五～十八句。「家」「車」「花」「霞」はいずれも『平水韻』下平聲六麻。紫陽山人の住まいでくつろぎ、仙界に親しむ李白の様子を描く。陳氏・杜氏は紫陽山人の登場する第十五・十六句について、李白「憶舊遊寄譙郡元參軍」（李太白全集巻十三）「紫陽之眞人、邀我吹玉笙。…我醉横睡枕其股。」（紫陽の眞人、我を邀へて玉笙を吹く。…我醉ひて横たはりて睡るに其の股に枕す。）、及び同「漢東紫陽先生碑銘」（同巻三十）の、「予與紫陽神交、飽飧素論、十得其九。…賢哉仙士、六十而化。光光紫陽、善與時而爲龍蛇。固亦以生死爲晝夜。」（予は紫陽と神交あり、素論を飽飧し、十に其の九を得。…賢きかな仙士、六十にして化す。光光たる紫陽、善く時と與にして龍蛇と爲る。固よりまた生死を以て晝夜と爲す。）を指摘されている。歐陽脩の詩の「吹笙飲酒」等は、直接には前者の表現を意識したものだろうが、さらに言えば、この紫陽山人と李白とを同一化しようとする傾向にあるのではないだろうか。また、第十七・十八句については、両氏は特に指摘されていないのだが、よく知られた「山中問答」（同巻十九）の、「問余何意棲碧山、笑而不答心自閑。桃花流水窅然去、別有天地非人間。」（余に問ふ　何の意ありて碧山に棲むかと、笑ひて答へず　心は自ら閑かなり。　桃花　水に流れ　窅然として去り、別に天地の人間に非ざる有り。）を踏まえ、李白自身の中での自問自答を描いている。

このように、この詩ではここまで、一部に杜甫や白居易の詩句を意識したものも含んでいるものの、その他は概ね李白の諸々の作品の表現を集め、それらをもとに李白の人物像を組み立て、描き出そうとしていた。それらは、太白星の精気を受けた神秘的な出生、その名声を高める契機となった「蜀道難」の持つ尋常を逸脱した迫力とスピード感、玄宗の宮廷での天衣無縫の振る舞い、というように彼の経歴を辿った伝記的な記述となっているが、その一方で、永王璘の軍に参加して夜郎へ流される、

また流浪の中で死去するといった晩年の経歴には触れず、名山に遊び月を愛で、ついには仙人の域に近づく超俗の人物としての李白を描いている。この詩の内容からは、歐陽脩が、李白という人物の天衣無縫の才能や神秘性、また超俗の存在としての属性に、特に関心を寄せていることが捉えられるだろう。歐陽脩本人が、苦学して科挙に合格した後、官僚の世界で浮沈を経験しつつ生きて参知政事にまで栄達し、年老いて引退したという、常に現実の社会や制度のなかに在り続ける生涯を送った人であることを思うと、このように李白の天衣無縫の才能や神秘性、また超俗の存在としての属性を特に好むのは奇妙なことのように思われるかもしれないが、むしろ常に官僚としての人生を生きた人だからこそ、李白という人物のそういった側面に憧れたのではないだろうか。

この詩には、最後にあと二句が続いている。

下看區區郊與島　下に看る　區區たる郊と島との
螢飛露濕吟秋草　螢飛び　露濕り　秋草を吟ずるを

「島」「草」はいずれも『平水韻』上聲十九皓。先の第十八句「飄然已去凌青霞」という状態にある李白から見た、後世、中唐期の孟郊・賈島の詩作する姿を描く。いずれも韓愈の門人であり、いわゆる「郊寒島瘦」で知られる孟郊・賈島は、ここでは李白の詩風を特徴付けるために、全く対照的な詩風の詩人として持ち出されたと思われる。なお、陳氏・杜氏の注は、南宋末期の嚴羽『滄浪詩話』（歴代詩話本）の「李杜數公、如金鵝擘海、香象渡海、下視郊・島輩、直蟲吟草間耳。」（李杜數公、金鵝の海を擘き、香象の海を渡るが如く、下に郊・島の輩の、直に草間に蟲吟するを視るのみ。）を挙げ、この詩の表現する歐陽脩の対李白評価が、後世の盛唐詩に対する高い評価に与えた影響を指摘されている。

三　視線の相違

前章で挙げた歐陽脩「太白戲聖俞」詩は、①太白星の精気を受けた神秘的な出生、②その名声を高める契機となった「蜀道難」の持つ尋常を逸脱した迫力とスピード感、③玄宗の宮廷での天衣無縫の振る舞い、というように李白の経歴を辿って伝記的に記述してはいたが、④晩年の永王璘の軍への参加と夜郎への流罪、また⑤流浪の中での死といった経歴に触れることはなく、李白を名山に遊び月を愛で、ついには仙人の域に近づく超俗の人物として描こうとしていた。そこで次には、李白をこのように描くことが当時の言説においてどのように位置づけられるのかを考えてみたい。

李白の伝記資料としてまず挙げるべきは、劉昫等『舊唐書』巻一百九十下文苑傳下・『新唐書』巻二百二文藝傳中に収められた傳であり、これらの描く李白像について整理しておく必要があるだろう。とりわけ北宋仁宗期に完成した『新唐書』の編修においては、歐陽脩も中心的な役割を担っている。（傳の部分の執筆を担当したのは宋祁とされる。）ここでは、既に見た歐陽脩「太白戲聖俞」詩で挙げられていた①～③、及び挙げられていなかった④⑤の点について、二つの正史の伝の記述と照らし合わせ、その視点の違いを捉えたい。

①　太白星の精気を受けた神秘的な出生

前章でも触れたように、『舊唐書』はこの点に言及しておらず、通常の伝記の体裁を踏襲して、「李白、字太白、山東人。」（李白、字は太白、山東の人なり。）と、諱・字・本貫を記すのみである。一方、『新唐書』は、「李白字太白、興聖皇帝九世孫。其先、隋末以罪徙西域、神龍初、

遁還、客巴西。白之生、母夢長庚星、因以命之。」（李白　字は太白、興聖皇帝九世の孫なり。其の先、隋末に罪を以て西域に徙り、神龍初め、遁れ還り、巴西に客たり。白の生まるるや、母　長庚星を夢む、因りて以て之に命づく。）というように、諱・字といった基本的な情報に加え、過去の帝王から続く血統、先祖の移動の様子、山東ではない巴西での出生を記し、半ば伝説的な要素も取り込みつつ李白という人物の特異性を強調している。神秘的な出生についての話は、これを受けて提示されているのであり、李白の特異性・神秘性を強調する要素のひとつとなっていると言えよう。

②「蜀道難」の持つ尋常を逸脱した迫力とスピード感

『舊唐書』では、伝の後半部で「衣宮錦袍」の逸話（後述参照。）に触れた後、「初賀知章見白、賞之曰、「此天上謫仙人也。」」（初め賀知章　白を見、之を賞して曰く、「此れ天上の謫仙人なり」と。）と記して、時系列から離れた賀知章による人物評として扱っているが、『新唐書』では、時系列中に配置し、「故白亦至長安。往見賀知章、知章見其文、嘆曰、『子、謫仙人也。』」（故に白はまた長安に至る。往きて賀知章に見え、知章　其の文を見、嘆じて曰く、「子、謫仙人なり」と。）と、かつ賀知章が賞賛した対象を文章として、その結果、賀知章によって玄宗に推挙され、ついに翰林供奉の職を得るに至ったとしている。しかし『新唐書』も、「蜀道難」という作品名とその内容には言及しておらず、歐陽脩の詩が、「蜀道難」の文学作品としての尋常を逸脱した迫力とスピード感に強い関心を寄せるのとは異なっている。

③ 玄宗の宮廷での天衣無縫の振る舞い

玄宗宮廷での李白の振る舞いについて、『舊唐書』は、「白既嗜酒、日與飲徒醉於酒肆。玄宗度曲、欲造樂府新詞、亟召白、白已臥於酒肆矣。召入、以水灑面、即令秉筆。頃之成十餘章、帝頗嘉之。」（白　既に酒を嗜み、日びに飲徒と與に酒肆に醉ふ。玄宗　曲を度して、樂府新詞を造らんと欲し、亟かに白を召すに、白　已に酒肆に臥す。召し入れ、水を以て面に灑ぎ、即ち筆を秉らしむ。之を頃くして十餘章を成し、帝　頗る之を嘉す。）と記し、いくらかの文字や表現の異同はあるものの『新唐書』もほぼ同じ内容を記す。また、泥酔して高力士に靴を脱がせるというよく知られた逸話を、『舊唐書』では、「嘗沉醉殿上、引足令高力士脱靴、由是斥去。」（嘗て殿上に沉醉し、足を引きて高力士をして靴を脱がしめ、是に由りて斥去せらる。）というように、宮廷から放逐された原因として記すが、『新唐書』は、「白嘗侍帝、醉、使高力士脱靴。力士素貴、恥之、擿其詩以激楊貴妃。帝欲官白、妃輒沮止。」（白　嘗て帝に侍り、醉ひ、高力士をして靴を脱がしむ。力士　素と貴にして、之を恥ぢ、其の詩を擿して以て楊貴妃を激す。帝　白を官せんと欲するに、妃輒く沮止す。）と、憤激した楊貴妃が任官を阻止したことなどの記述を加える。さらに、「白自知不爲親近所容、益驁放不自脩、」（白　自ら親近の容るる所と爲らざるを知り、益ます驁放にして自ら脩めず、）と、李白が次第に周囲との齟齬を自覚して行動をエスカレートさせていく様子を述べ、李白の辞職を自ら求めたものとしており、玄宗宮廷での自覚的な不適応状態をより強調する表現になっている。また李白が「酒八仙人」の一人であることに言及するが、これは杜甫「飲中八仙歌」（杜詩詳註巻二）等に基づくものだろう。

④ 晩年の永王璘の軍への参加と夜郎への流罪

『舊唐書』は、「祿山之亂、玄宗幸蜀、在途以永王璘爲江淮兵馬都督・揚州節度大使。白在宣州謁見、遂辟爲從事。永王謀亂、兵破、白坐長流夜郎。」（祿山の亂るるや、玄宗　蜀に幸し、途に在りて永王璘を以て江淮兵馬都督・揚州節度大使と爲す。白　宣州に在りて謁見し、遂に辟して從事と爲す。永王　亂を謀り、兵破れ、白　坐して長く夜郎に流さる。）と記し、永王璘の乱に加わったため流罪となったと説明するが、『新唐書』はより詳細に、「安祿山反、轉側宿松・匡廬間、永王璘辟爲府僚佐。璘起兵、逃還彭澤。璘敗、當誅。初、白游幷州、見郭子儀、奇之。子儀嘗犯法、白爲救免。至是子儀請解官以贖、有詔長流夜郎。」（安祿山反き、轉側して松・匡廬の間に宿するに、永王璘　辟して府僚佐と爲す。璘起兵するに、逃れて彭澤に還る。璘敗れ、誅に當たる。初め、白　幷州に游びて、郭子儀に見え、之を奇とす。子儀　嘗て法を犯し、白は救免を爲す。是に至りて子儀　官を解きて以て贖せんことを請ひ、詔有りて長く夜郎に流さる。）と述べ、李白は彭澤に逃れて戦闘に加わらなかったが処罰の対象となった、また、夜郎に流されたのは郭子儀とのいきさつによると述べるが、これは両者が基づいた資料の違いによるものだろう。歐陽脩の詩がこの件に触れないのは、超俗の詩人のイメージにそぐわぬものとして回避したと思われる。

⑤ 流浪の中での死

歐陽脩の詩では、李白を名山に遊び月を愛で、ついには仙人の域に近づく超俗の人物として描き、流浪中の態度やその死については特に触れていなかった。『舊唐書』は、流浪中の態度について、「乃浪迹江湖、終日沉飲。時侍御史崔宗之謫官金陵、與白詩酒唱和。嘗月夜乘舟、自采石達金陵、白衣宮錦袍、於舟中顧瞻笑傲、傍若無人。」（乃ち迹を江湖に浪し、終日　沉飲す。時に侍御史崔宗之　金陵に謫官せられ、白と與に詩酒唱和す。嘗て月夜に舟に乘じ、采石より金陵に達するに、白　宮錦袍を衣し、舟中に於いて顧瞻笑傲すること、傍らに人無きが若し。）と記し、『新唐書』もそれを踏襲し、「白浮游四方、嘗乘舟與崔宗之自采石至金陵、著宮錦袍坐舟中、旁若無人。」（白　四方を浮游し、嘗て舟に乘りて崔宗之と與に采石より金陵に至るに、宮錦袍を著けて舟中に坐し、旁らに人無きが若し。）と記す。かつて宮中で着た錦の衣を身につけた「傍若無人」な姿について、歐陽脩の詩が言及しないのは、やはりイメージを損なうものと感じたのだろう。

李白の死について、『舊唐書』は簡明に、「後遇赦得還、竟以飲酒過度、醉死於宣城。有文集二十卷、行於時。」（後に赦に遇ひて還るを得、竟に酒を飲みて度を過ぐるを以て、醉ひて宣城に死す。文集二十巻有り、時に行はる。）と述べて傳の全篇を閉じるが、『新唐書』はさらに詳細に、「會赦、還尋陽、坐事下獄。時宋若思將呉兵三千赴河南、道尋陽、釋囚辟爲參謀、未幾辭職。李陽冰爲當塗令、白依之。代宗立、以左拾遺召、而白已卒、年六十餘。白晩好黄老、度牛渚磯至姑孰、悦謝家青山、欲終焉。及卒、葬東麓。」（赦に會ひ、尋陽に還り、事に坐して獄に下る。時に宋若思　呉兵三千を將ひて河南に赴き、尋陽に道し、囚を釋きて辟して參謀と爲すも、未だ幾ばくならずして職を辭す。李陽冰　當塗令爲り、白　之に依る。代宗立ち、左拾遺を以て召すも、白　已に卒し、年六十餘なり。白　晩く黄老を好み、牛渚磯を度りて姑孰に至り、謝家の青山を悦び、終えんと欲す。卒するに及び、東麓に葬る。）と、その後の動静を記す。また『新唐書』は、さらに後の元和末年に二人の孫娘が置かれていた状況、文宗期に李白の歌詩が裴旻の劍舞、張旭の草書と並んで

「三絶」とされたことにも言及する。

このように見てくると、欧陽脩の詩に描かれていた李白の像は、詩という形式を用いた文学的表現であるから当然とはいえ、宮廷での不適応状態の自覚や反乱軍への参加と流罪、流浪の中での死といったマイナスのイメージに繋がる経歴には触れず、神秘的な出生や「蜀道難」の作品としての素晴らしさといった、超俗の詩人としての属性に専ら焦点を絞り、強調したものであることがより明らかになるだろう。逆の方向から言うならば、史書に収められた伝記は、編集者の意図が全く含まれないとは言えないものの、そのような理想化を取り去った、一人の実在の人物としての経歴や人となりを捉えることを志向している。歐陽脩自身が、『舊唐書』所収の伝、あるいは彼自身も編修に携わった『新唐書』の伝の内容について、どのような感想を持ったのかはわからないが、理想化された李白像とのギャップを直截に指摘している例として、前章で李白詩集の編年化にかかわって取り上げた曾鞏の場合を挙げてみよう。次に示すのは、その「李太白文集後序」（李太白全集巻三十一）の後半、李白の伝記を記した部分の末尾部分である。

『舊史』稱白山東人、爲翰林待詔、又稱永王璘節度揚州、白在宣城謁見、遂辟爲從事。而『新書』又稱白流夜郎、還尋陽、坐事下獄、宋若思釋之者、皆不合於白之自敍。蓋史誤也。白之詩連類引義、雖中於法度者寡、然其辭閎肆雋偉、殆騷人所不及、近世所未有也。『舊史』稱白有逸才、志氣宏放、飄然有超世之心、余以爲實錄。而『新書』不著其語、故錄之、使覽者得詳焉。

『舊史』に稱するに白は山東の人にして、翰林待詔と爲り、又た永王璘の揚州に節度するに、白は宣城に在りて謁見し、遂に辟して從事と爲すと稱す。而も『新書』は又た稱するに白は夜郎に流され、尋陽に還り、事に坐して獄に下ると、宋若思の之を釋するは、皆な白の自叙に合はず。蓋し史誤れるなり。白の詩は類を連ねて義を引き、法度に中る者は寡しと雖も、然も其の辭は閎肆雋偉にして、殆んど騷人の及ばざる所にして、近世の未だ有らざる所なり。『舊史』は白は逸才有り、志氣宏放にして、飄然として超世の心有りと稱す、余　以て實錄と爲す。而も『新書』は其の語を著せず、故に之を錄し、覽る者をして詳しきを得しめんとす。

曾鞏の批判は、まず『新唐書』の晩年部分の記述に向かっている。李白の個々の詩を編年化していく作業の中で、彼自身、李白の事跡について様々な検討を重ねたであろうし、ここでの「李白自身の述べるところと合致しない」という批判は、それを踏まえたものだろう。その後、曾鞏の筆は李白詩そのものの評価に及び、「同類を連ねて義理を引用し、規則に適うものは少ないが、その言葉遣いは内容が豊富で表現が自由であり、おそらく屈原らの及ばぬものであり、近い時代にはないものである」と高く評価し、さらにその人となりについては、『舊唐書』の「逸才有り、志氣　宏放にして、飄然として超世の心有り」を史実に忠実なものとして評価して、『新唐書』がこの語を載せないことを指摘する。詩集の序文として書かれたものという事情はあるが、ここでの曾鞏は、より正確な史実を記録することを求めながらも、李白を超俗の詩人として把握しようとしており、その態度は正史のものよりも歐陽脩の詩に表現されたものにより近いと思われる。しかし、曾鞏もまたこの伝記のなかで、玄宗宮廷における李白の不適応状態とその自覚、また衣宮錦袍の傍若無人な態度には触れていない。このような曾鞏の姿勢には、彼のうちに抱かれた理想化された李白像と、正史、特に『新唐書』の描く像との間の隔たりに対するとまどいを見ることができるだろう。

このように、北宋仁宗期の文人たちの李白に対する視線には、超俗の詩人として理想化しようとするものと、より史実に近い像を捉えようとするものとが存在したと思われるが、その他に、李白を済世の人として位置づけようと試みる視線も存在したようだ。例として釋契嵩（一〇〇七～一〇七二）「書李翰林集後」（鐔津文集巻十六　四部叢刊廣編本）を挙げてみよう。

余讀『李翰林集』、見其樂府詩百餘篇、其意尊國家、正人倫、卓然有周詩之風、非徒吟咏情性、咄嘔苟自適而已。白當唐有天下第五世時、天子意甚聲色、庶政稍觧、姦邪輩得入、竊弄大柄。會禄山賊兵犯闕、而明皇幸蜀、白閔天子失守、輕棄宗廟、故作「遠別離」以刺之。

余　『李翰林集』を讀み、其の樂府詩百餘篇を見るに、其の意は國家を尊び、正倫を正し、卓然として周詩の風有り、徒らに情性を吟咏し、咄嘔して苟か自適するに非ざるのみ。白　唐の天下を有ちて第五世の時に當たり、天子　意甚だ聲色にあり、庶政稍や觧し、姦邪の輩　入るを得、竊かに大柄を弄ぶ。禄山の賊兵の闕を犯すに會して、明皇　蜀に幸し、白　天子の守を失ひ、輕く宗廟を棄つるを閔み、故に「遠別離」を作り以て之を刺す。

さらに後文では、次のように述べている。

邇世説李白清才逸氣、但謫仙人耳、此豈必然耶。觀其詩、體勢才思如山聳海振、巍巍浩浩、不可窮極、苟當時得預聖人之刪、可參二「雅」、宜與「國風」傳之於無窮、而「離騒」・「子虚」不足相比。

邇世　説くらく　李白は清才逸氣にして、但だ謫仙人なるのみと、此れ豈に必ずしも然らんや。其の詩を觀るに、體勢・才思　山聳え海振ふが如くにして、巍巍浩浩として、窮極すべからず、苟くも當時　聖人の刪に預かるを得れば、二「雅」に參ずべく、宜しく「國風」と與に之を無窮に傳ふるべく、而して「離騒」・「子虚」は相ひ比ぶるに足らず。

ここで釋契嵩は、李白詩の風刺性に着目し、当時通行していた謫仙人としての李白像を超えた、『詩』の継承者としての正当性を主張している。このような主張は、かえってすでに当時において、李白に対しては『詩』の継承者としての風刺性・社会性が指摘されることは少なく、もっぱら「清才逸氣の謫仙人」としてのイメージや評価が通行していたことを示すものであろう。当時の知識人たちの間で広く支持されつつあったのは、現実の社会に目を向け、そのありさまを詩の中に写実的に描き出していく杜甫の詩風であり、忠義の人としての人となりであった。現実の社会から遊離した高踏的な理想・夢想を描く李白の詩風、あるいは天衣無縫・傍若無人な李白という人物は、憧れを寄せる対象ではあっても、彼らの時代の志向には馴染みにくいものと感じられたのではないだろうか。釋契嵩「書李翰林集後」の描くこのような李白像は、当時の価値観により合致する位置づけを求める試みと捉えることもできるだろう。

さらに言うならば、全国を流浪し、内乱に翻弄された謫仙人たる大詩人李白の生き様は、宋代の知識人たちにとっては、憧憬の対象とはなっても、必ずしも身近なものとは感じられなくなっていったのではないだろうか。その官僚としての格付けはさまざまであっても、安定した社会制度と官僚組織のなかに身を置いて日々を生きている当時の知識人たちにとって、その秩序から離脱することは容易なことではなかったであろうし、また、彼らの日常には、小さな波乱はあっても、劇的な出来事は決して多くなかったのではないだろうか。むしろ、彼らの毎日は大抵平凡なものであり、そのような日常の中にある情感こそ、彼らにとって親

しいものであったのだろう。そこで彼らの制作する詩は、そのような日常の中にある情感をいかにうまくとらえて表現するかを希求するものになっていったのだろう。彼らにとっては、李白という人の生き様が身近なものとなりにくいのと同様に、ロマンチシズムに富み、感情の大きなうねりを歌い上げる謫仙人の詩風もまた、憧憬を寄せる対象ではあっても、普遍的な詩作の理想となり得るものとは感じられなかったのではないだろうか。

四　郭祥正 ―ある「李白後身」のこと―

本稿の最後に、その後の北宋中、後期にかけての李白とその詩作品の受容のされ方をうかがわせるひとつのケースを挙げておきたい。ここで挙げるのは、現代の文学研究では取りあげられることの少ない、郭祥正（一〇三五～？）という人物である。なお、郭祥正の制作した詩文を整理したものに、孔凡禮氏『郭祥正集』（安徽古籍叢書　黄山書社　一九九五年）があり、同書の附録一「郭祥正事迹編年」は、その伝記を詳細に検討されている。以下の検討を進めるに当たっては、この事迹編年を参考にさせていただいたところが多い。

この郭祥正という人物について、『宋史』巻四百四十四文苑傳六（中華書局本）の郭祥正傳は、「梅堯臣方擅名一時、見而歎曰、『天才如此、眞太白後身也。』」（梅堯臣　方に名を一時に擅にす、見て歎じて曰く、「天才なること此くの如し、眞に太白後身なり」と。）と記しているのだが、孔氏の編年ではこれを、至和元年（一〇五四）の年末に、宣城（現安徽省宣城縣）の昭亭に寓居していた郭祥正が、当地で母の喪に服していた梅堯臣と面会した際のできごととされている。

この時梅堯臣が制作した、「依韵和郭祥正秘校遇雨宿昭亭見懷」詩（朱東潤氏『梅堯臣集編年校注』巻二十四　中國古典文學叢書　上海古籍出版社　二〇〇六年新一版）の、「一誦廬山高、萬景不可藏。」（一たび廬山高を誦するに、萬景　藏るべからず。）という表現からは、このとき郭祥正が、歐陽脩「廬山高贈同年劉中允歸南康」（居士集巻五）を諳んじてみせたことがわかるが、同じ時期に梅堯臣が制作した「采石月贈郭功甫」詩（梅堯臣集編年校注巻二十四）の冒頭に、「采石月下聞謫仙、夜披錦袍坐釣船。」（采石　月下　謫仙を聞く、夜　錦袍を披し　釣船に坐す。）とあり、「謫仙」「披錦」という表現からも、梅堯臣が郭祥正を李白に見立てていることが明らかである。ここでは李白詩に対する評価が、歐陽脩と関わって現れていることに注目したいが、郭祥正は歐陽脩の李白詩に対する評価の高さを意識して、ことさらにその「廬山高…」を取り上げたとも考えられるのではないだろうか。

また、この李白後身という評価は、いくらかの人々の間で共有されたらしく、呉曾『能改齋漫録』巻十議論の、「聖兪諸公以郭功甫爲李太白後身」（宋元筆記叢書　上海古籍出版社　一九八四年第二版）には、次のような記事を見ることができる。

章衡子平答郭功甫書、其略云、「鄭公毅夫、吾叔表民及梅聖兪、皆以功甫爲李謫仙之後身。吾不知謫仙之如夫子之少時、其標格淵敏、已能如此老成否。」

章衡子平の郭功甫に答ふる書、其れ略ぼ云へらく、「鄭公毅夫、吾が叔表民及び梅聖兪、皆な功甫を以て李謫仙の後身と爲す。吾　謫仙の夫子の少き時の如く、其の標格淵敏にして、已に能く此くの如く老成するや否やを知らず」と。

ここでは、章衡（字子平　一〇二五～一〇九九）が郭祥正（字功甫）

に答えた書信を引いて、鄭獬（字毅夫　一〇二二～一〇七二）・章望之（字表民　生卒年未詳）・梅堯臣（字聖俞　一〇〇二～一〇六〇）が、みな郭祥正を李白の生まれ変わりとみなしたと述べ、章衡自身も、李白と比較して郭祥正の年若い老成ぶりを評価している。

郭祥正は、このように比較的若年期に、梅堯臣ら年嵩の世代から李白後身としての評価を受けていたのだが、その後、ある問題を起こしてその名声を失ってしまう。これについて、『宋會要輯稿』第九十八冊「職官」六六之二七（中華書局本）の元豐七年（一〇八四）二月十三日（なお、『續資治通鑑長編』巻三百四十四（中華書局本）は同じ記事の日付を三月壬子（十三日）とする。）の記すところによると、その罪は僧侶と共謀した金銭横領であったらしい。結果的に、この事件により、郭祥正は官としての身分と社会的信用を失い、この後、彼を李白後身として評価する言辞は見られなくなった。陸游（一一二五～一二一〇）『入蜀記』（渭南文集巻四十四　四部叢刊本）乾道六年（一一七〇）七月十三日の記事によると、蘇軾（一〇三六～一一〇一）は、李白「姑孰十詠」は「太白後身」郭祥正の贋作ではないかと疑ったという。郭祥正は、その後も様々な人物、具体的には王安石・蘇軾・蘇轍・王安禮・黄庭堅・李之儀らと交遊するが、概して評判は芳しくないようだ。また、その没年は明らかではないが、徽宗政和年間（一一一一～一一一八）まで生きていたらしく、北宋中期から晩期にかけての長い期間を生き、数多くの文人と交流している点でも興味深い人物である。

孔凡禮氏は『郭祥正集』の序（二頁）のなかで、郭祥正の作品は若年期の基礎をうまく伸ばすことができず、一種の停滞状態にあった（他的作品并没有在早期的基礎上有着明顯的突破、或者説、處在一種相對停滞状態。）、と指摘されているが、たしかにそういう面はあったのだろう。

しかし、史書や筆記等の資料から見た限り、彼が社会的評価を落としたのは、詩才の成長不良のためではなく、その人格・行動に対する批判によるもののようだ。「李白後身」に対する評価が下がったのは、李白に対する評価が低下したからではない。しかし、郭祥正という人物が評価を失っていく様子に、李白的な天衣無縫さやその詩風が、次第に世の中の志向から乖離していく様を見るのは、穿ち過ぎた見方だろうか。北宋中期から晩期にかけての時期には、蘇軾の言葉も伝えているように、詩の「集大成」者としての杜甫の位置づけはすでに固まり、さらに詩作の規範として特別な存在になっていく。このような時代に「李白後身」を自認し、標榜すること自体が、次第に時代遅れと感じられたのではないだろうか。歐陽脩から蘇軾を経、さらに後代へ、時代は変わっていくのだ。

郭祥正は没後、郷人によって青山李白祠に祀られた。『入蜀記』（同巻四十五）の記事によれば、乾道六年七月十七日に陸游がここに立ち寄った際、「烏巾白衣錦袍」というおなじみのいでたちの李白の側に、「道帽氅裘、侑食於側。」（道帽氅裘し、側に食を侑（すす）む。）する郭功甫の像があったという。没後には「李白後身」、少なくとも李白の追随者としての面目は保ったらしい。